鹿児島県立鶴丸高等学校広報紙

第45号　H21．11．9

好学愛知
自律敬愛
質実剛健

鶴信

鹿児島県立鶴丸高等学校
〒890-8502　鹿児島市薬師二丁目1番1号
TEL 099-251-7387 FAX 099-255-3433
http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/Tsurumaru/top.html

鶴丸高校話

生徒指導課副主任　和田　倫周

現役高校生のプロゴルファー・石川遼選手の活躍に代表されるように、ここ数年、各界において十代の活躍がめざましい。第130回の芥川賞を受賞した、綿矢りささん(19)も記憶に新しいところだ。

こうした特別な才能の持ち主だけでなく、すべての若い人に対して期待を抱いている作家がいる。広い視野から問題を提起する大江健三郎さんだ。彼は夫人の大江ゆかりさんが画を寄せている著書『「新しい人」の方へ』(朝日新聞社刊)の中で、自分の幼児体験から説きおこし、ニューヨークのテロに触れ、争いの歴史を繰り返してきた古い人(大人)の立場から、若い人にあってほしい姿を繰り返し語っている。それは、「新しい人」になってもらいたいということ。「新しい人」というのは、敵意を滅ぼし、対立する二つの世界に本当の和解をもたらす人のこと。大江さんはこの言葉を、新約聖書のパウロの手紙から引用している。『キリストが平和をあらわすのは、対立してきた二つのものを、十字架にかけられた御自身の肉体をつうじて、ひとつの「新しい人」に作りあげられたからである』

人類を死滅させるかもしれない核兵器の所有、終わりのない国や民族(宗教)間の武力闘争、多発するテロ行為…平和とは程遠い現実。世界中が大江さんの説く「新しい人」になるほかない。

十代の終わり、私は一人で海外に出かけるようになった。自活していた私は懸賞論文や面接をクリアし、欧米を渡り歩いた。そして大学を卒業すると同時に旅行会社に入社し、ヨーロッパを中心に仕事をするようになった。バブルの真っ直中だったその頃は、経済的に豊かになった日本が、本当の意味で『国際化』しようとか、日本人が『国際人』になるには、といった話題が取りざたされていた頃だった。現在では小学校の授業でさえ、英語教育を中心に国際理解教育に力を入れている。『国際化に向けて』とか『国際人の育成』のために語学教育はもちろん大切だが、その頃から私は『国際化』『国際人』の前提として、日本人が日本の文化や歴史をもっと知っておく必要性を強く感じてる。

私自身、仕事の関係で頻繁に海外に出かけるようになった時、最初はその国のことを知りたくてしかたがなかった。しかし、ある時ハッと気づいたのが、自分はなんて日本のことを知らずに育ったんだろうということだった。どの国に行っても必ず「日本はどんな国？　どんなところ？」と聞かれるのだが、答えに困ったり、思うように説明できないことがあって、反省した覚えがある。

また、日本語教育もきちんと行う必要があると思う。経験的に外国語力と日本語力は並行して伸びていくと考えているからだ。また日本語がきちんとでき、日本の文化や歴史などの教養があれば、英語で話すときも話題が豊富になる。これは英語以外の外国語も同様である。国際化ということで、語学や世界情勢などの面に視線が行きがちだが、まずは基本に正しい日本語や日本人としての知識・教養を身につけることこそが、大切なことだと考える。つまり、日本という足場を固め、その上で世界を見ることが必要なのではないか。

君たちは今、足場を固める時期にある。固める場所として最善の鶴丸で、絶対的で、圧倒的な足場、「基礎」をである。鶴丸で学ぶことに無駄なことは何もない。長い年月に耐え得た学問の価値というものはほぼ絶対的なものといえる。そしてこの「絶対的な価値」を持つものこそが君たちの成長に不可欠なのだ。これこそが君たちの足場を固める恰好の材料となる。たとえば母親が我が子に純粋なもの、本物を与えたいと願うように、鶴丸の教師は生徒に本物の教材を与えたいと思う。学問はこの思いにきちんと応えてくれる。学問的にも人間的にもこの鶴丸で強固な足場を作り上げるためにも、自らのアイデンティティーを模索し、悩み、努力して、これからの人生、本当の意味で社会の中核を担っていく「新しい人」になってほしいと思う。

「新しい人」になるには、単純な毎日の繰り返しの中での、丁寧な積み重ねが不可欠である。それは簡単に言うと、当たり前のことを当たり前に実行することである。私はこの当たり前のことを積み重ねることのみが、絶対的で、圧倒的な足場を固めるための唯一無二の手段であると信じて疑わない。

生徒指導重点項目がこの半年、変わっていない。過去に例がない事態が続いている。今現在も、継続中である。端正な服装容儀「頭髪とバッジ」。変わらないのは十分な改善がなされていないからである。当たり前のことが当たり前にできなくなり、それを容認しかけていることに危機感を感じている。

何にこだわるのか、どこに自分の持ち合わせるエネルギーを使うのか、高校生にとっては悩ましい課題なのかもしれない。学習、部活動、友人関係、習い事、趣味などなど。それぞれが自分の中で優先順位をつけ、かけるエネルギーを切り分けて毎日を過ごしてる。しかし、君たちなら分かるはずだ。今、優先順位の一番目に何を持ってくるべきかを。目標を実現させるためにも、当たり前のことを当たり前に、愚直に実行し、本物の「新しい人」になってほしい。

第32回定期演奏会

8月19日(水)、午後2時から第32回定期演奏会が宝山ホールにて催された。今年は新型インフルエンザの影響により、吹奏楽部が急遽、不参加を余儀なくされたが、音楽部員は大幅に曲目を増やすことで突然の事態に対応してくれた。また、3年生の志野文音さんによるギター演奏や金賞に輝いた吹奏楽部のコンクール曲(録音)を鑑賞するなど、例年に匹敵する、工夫を凝らした素晴らしい演奏会となった。

音楽部部長の原田君が、「吹奏楽部のいない演奏会は辛かったが、今回経験した葛藤を今後に活かしたい。感慨深い夏だった。」と前向きに振り返る今年の定演は、OBの先輩方に支えられながら確かに培われつつある、鶴丸の伝統と底力を感じさせるものであったと言えよう。

第61回体育祭

生徒会体育局局長　嶽　亮佑

今年も第61回鶴丸高校体育祭が無事に終わりました。この大きな行事を成功させるために「生徒が創りあげる体育祭」をモットーに生徒会は6月から準備を始めました。体育科の先生方をはじめ様々な先生方と話し合い、計画を立て、自宅待機期間中もそれぞれの自宅で出来る限りのことをしました。夏期休業中であろうが、忙しいテスト期間中であろうが、生徒会役員は資料作成や訂正に奔走しました。そして各学級の体育委員に指示を出し学級をまとめてもらい、部活動生の協力を得て準備や係の仕事をしてもらい、生徒が主体となって体育祭を創りあげていきました。また、応援団も夏休みに入る前からの厳しい練習を乗り越えて華麗な演舞を魅せ、学年全体をまとめあげるリーダーとしてそれぞれの組で優勝を目指して引っ張ってくれました。

今年はインフルエンザなどで、体育祭直前まで学級閉鎖となってしまったクラスもあり苦しい状況での開催となりましたが、生徒全員が一つになり最後までやりきることができました。『昇鶴乱舞～栄光へ飛び立つ閃光の鶴翼～』のスローガンのもと、全学年が熱い思いを持って優勝というゴールを目指し翠組が優勝となりましたが、3年生は鶴丸生としての姿を後輩に見せ、1年生は鶴丸の一員としての自覚がより強くなったことと思います。この体育祭をとおして深まった絆を武器に3年生は受験に勝利し、1・2年生は今後の学校生活を充実したものにしてほしいと思います。

第61回文化祭

芸術科　遠藤　武夫

10月9日(金)、鶴心響魅～煌く想い響く想い～のキャッチフレーズのもと、第61回の文化祭が開催された。体育館では全員がマスク着用という、一種異様な雰囲気であったが、ようやく開会式までこぎつけたというのが正直な感想であった。

ステージ部門は放送部のビデオ上映で幕を開けた。テレビドラマ「天秤」は鶴丸生の価値観に一石を投じた。すっかり文化祭名物になった「からいも標準語講座パート2」は場内を大いに沸かせた。クラスによる舞台発表では、21Rと22Rが劇を上演した。伝えたいことが明確で、表現方法も洗練されており、20分ではあったが見応えのある内容であった。音楽部は多彩なレパートリーで合唱の魅力あふれるステージを展開した。ダンス部は、10名の一年生を加えた12名で迫力のステージを繰り広げ、会場を盛り上げた。演劇部は部員2名に助っ人2名であったが、迫真の演技で観客を魅了した。書道部は、ダイナミックな筆使いで大作を書き上げ、その美しさと迫力に会場からは歓声があがった。ステージ部門の中盤は、特別参加団体が演奏した。どの団体も個性的かつ魅力的で会場と一体となって音楽を楽しむ姿が見られた。今年は、ヴァイオリン独奏、ピアノ連弾、ピアノソロもあり、鶴丸生の多彩さとレベルの高さには目を見張るものがあった。ステージ部門の後半は、吹奏楽部の演奏であった。新メンバーでの演奏であったが、安定した演奏と演出で会場を盛り上げた。

1、2年生の教室には、各クラスのユニークな取り組みが展示・発表され、参観者の興味をひいていた。例年に比べ準備時間が少ない中で、よく取り組んでいたという評価がある一方、1年生に研究的な内容のものが少なく物足りなさを感じたという声も聞かれた。化学部、美術部、イラストレーション研究部、書道部、百人一首部、将棋同好会はこの日のために制作した力作を展示・発表したり、実験や実演等のパフォーマンスを披露したりした。茶道部は、草寿庵で「秋鶴苑」を催した。ゆったりとした時間の流れを楽しむ生徒の姿が印象的であった。インフルエンザに対する配慮から食物バザーとお茶会を、一般の方々に利用して頂けなかったことは、非常に残念であった。

7月下旬以降、学校生活には常に新型インフルエンザの不安が付きまとい、文化祭も、「平日開催」「マスクの着用」「換気の徹底」の対策を講じることとなった。しかし、生徒会はこれらの制約を解消するために知恵を出して対処した。例えば、体育館では閉じた窓全面に、新聞紙を貼りつけた。それにより、ある程度の暗さを確保し、照明効果を得ることができた。

今年は、ステージ部門が特に充実していたという評価が多く聞かれた。これは、制約を解消して少しでもよい条件で舞台発表をさせたいという生徒会の強い気持ちが、各クラス・団体に浸透し、完成度の高い発表を生み出したからだと思う。ルネッサンスを代表する天才レオナルド・ダ・ヴィンチは「私は決して障害に屈しはしない。いかなる障害も、私の中に強い決意を生み出すまでだ。」と語っている。私は、今年の文化祭における生徒会の働きぶりに、ダ・ヴィンチと共通する底力を感じた。

11,12月の行事予定

11　月		
9	月	全校朝会
10	火	学校安全の日
11	水	
12	木	**3年実力考査（1日目）**
13	金	**3年実力考査（2日目）** **ロードレース大会**
14	(土)	
15	(日)	第2回英検二次試験
16	月	学年朝会　集団読書(1，2年)
17	火	
18	水	
19	木	3年PTA評議委員会
20	金	卒業考査・中間考査時間割発表
21	(土)	悠学講座⑦
22	(日)	
23	(月)	勤労感謝の日
24	火	
25	水	
26	木	
27	金	第2回学校関係者評価委員会
28	(土)	
29	(日)	
30	月	**卒業考査(1日目)** 進路検討会(～12/3)
12　月		
1	火	**卒業考査(2日目)** **中間考査(1日目)**　職員体育
2	水	**卒業考査(3日目)** **中間考査(2日目)**　ICT研修(全職員)
3	木	**卒業考査(4日目)** **中間考査(3日目)**
4	金	**1・2年クラスマッチ** **3年月曜の授業**
5	(土)	悠学講座⑧

定期教育相談（5分短縮授業）